

# コンドルによる社頭祭礼風景の写生(スケッチ)について

## Study on the sketch of festival scenery in front of the shrine by J. Conder

平山 育男  
HIRAYAMA Ikuo

キーワード: J・コンドル、八坂神社、写生(スケッチ)

Keywords: J. Conder, Yasaka shrine, sketch

This article considers the sketches of the festival scenery in front of the shrine, contained in the third volume of Conder's sketchbook. The following points will be clarified. The sketch of the festival scenery in front of the shrine in Conder's sketchbook depicts the front of the Nishi-romon of Yasaka Shrine in Kyoto. The sketch can be judged to be a depiction the Shinko-sai in the Gion Matsuri. Conder visited Kyoto at least twice, around July 1884 and around March 1895. Considering the timing, this sketch can be thought of as depicting the scenery of the Shinko-sai held on July 17, 1884.

### 1. はじめに

J・コンドルは明治10(1877)年1月に来日したお雇い外国人である。筆者はコンドルが残したスケッチ・ブック<sup>参考1)</sup>については既に幾つの論考をまとめている<sup>注1)</sup>。

本稿は、コンドルがスケッチ・ブックに残した写生(スケッチ)の内、従来は写生(スケッチ)場所、と写生(スケッチ)の時期が特定されていない社頭風景を描いた写生(スケッチ)について考察を加え、これがどこの風景を、いつ頃描いたものかを明らかにすることを目的とする。

### 2. コンドルが描いた社頭祭礼風景の写生(スケッチ)

コンドルが描いた社頭祭礼風景の写生(スケッチ)は、スケッチ・ブックの第3冊5頁に添付される(図1)。写生(スケッチ)は縦長で彩色が施されている。図中への文字の書き込みを確認できないため、何時、何処の風景を描いたものか、文字情報を通して確認することはできない。以下、写生(スケッチ)の描写内容を検討することで、写生(スケッチ)の考察を進めたい。

#### 2-1. 社頭祭礼風景の写生(スケッチ)の描写内容

写生(スケッチ)の近景では、画面向かって右側に大きく冠木門と隣家の塀、道路に対して切妻平入の形式となる町家の妻面の一部が描かれる。住宅前には柵が設けられ、提灯が吊り下げられている。なお、写生(スケッチ)を行っ

たコンドルの視線はやや高く、画面に描かれる町家などの様子から、この冠木門に隣接する町家の2階からの俯瞰とすることができる。画面向かって左側の近景は、町家前の通りを埋め尽くす人々の描写となる。住宅前には婦人数名がおり、その前を、傘を頭に被り、駕籠棒を持つ白装束の集団、鎧をまとった武人、黒い旗2本を先頭として、神輿が進む。通りの反対側にも多くの見物人と、向かいの家屋が描かれる。

中景は社頭の建物で、描かれる部分は正面3間切妻造の形式となるもので、朱塗の軸組で白壁、瓦葺で描かれる。中央間に朱塗の扉があり、少なくとも向かって左側に彩色を施した窓が配されるものと判断できる。門前には仮設であろうか、提灯6基を掲げた建物があり、傍らに狛犬、門脇の土塀が描かれる。

遠景は門背面の社叢で、背景に山並みが描き込まれる。

#### 2-2. 関連する写生(スケッチ)

上記の社頭における祭礼風景に関係すると判断できる写生(スケッチ)をスケッチ・ブックから探すと、以下の作品を見出すことができる。

その写生(スケッチ)はスケッチ・ブック第3冊1頁下段に配される横長のもので、向かって右側に神輿、向かって左側に紋付を羽織った人物が描かれる(図2)。第3冊5頁の作品に対しては下絵的なものと判断することができる。但し、第3冊5頁の神輿に対し、第3冊1頁の神輿は八角形平面と見ることができ、両者は異なるものを描いたと判断できる。

### 3. コンドルが描いた社頭風景の写生(スケッチ)の場所

中景に描かれる建物は、社頭の風景から考え、両脇に土塀なども構える門であり、塀の高さから2階建の形式と判断できる。ところで、この建物は切妻造であることから、2階建の門形式で切妻造、朱塗の形式であることを条件で当該の建物に当たると、これは八坂神社西楼門を描いたものと判断できる。

なお、現在の八坂神社西楼門では門の両脇となる南北に矩形の平面となる翼廊が取り付け、写生(スケッチ)の景観とはやや異なるものとなっている。この点について古写真を確認すると、近代において楼門前は以下の変遷を遂げた<sup>注2)</sup>と判断できる。



写真1 京都八坂神社(絵はがき)

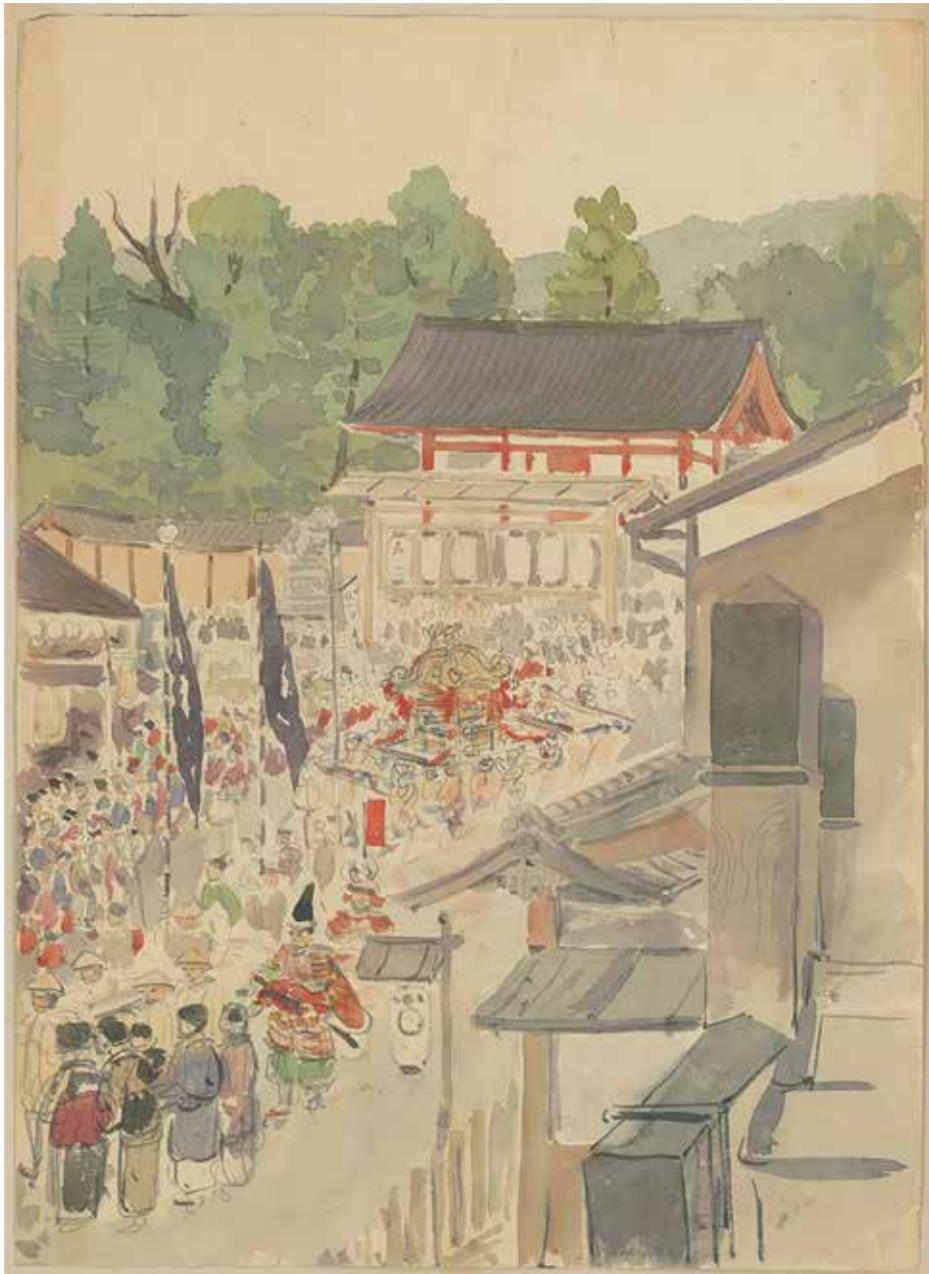


図1 コンドルのスケッチ・ブック第3冊5頁 社頭祭礼風景の写生（スケッチ）

図版は東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵



図2 コンドルのスケッチ・ブック第3冊1頁 神輿の写生（スケッチ）

図版は東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵



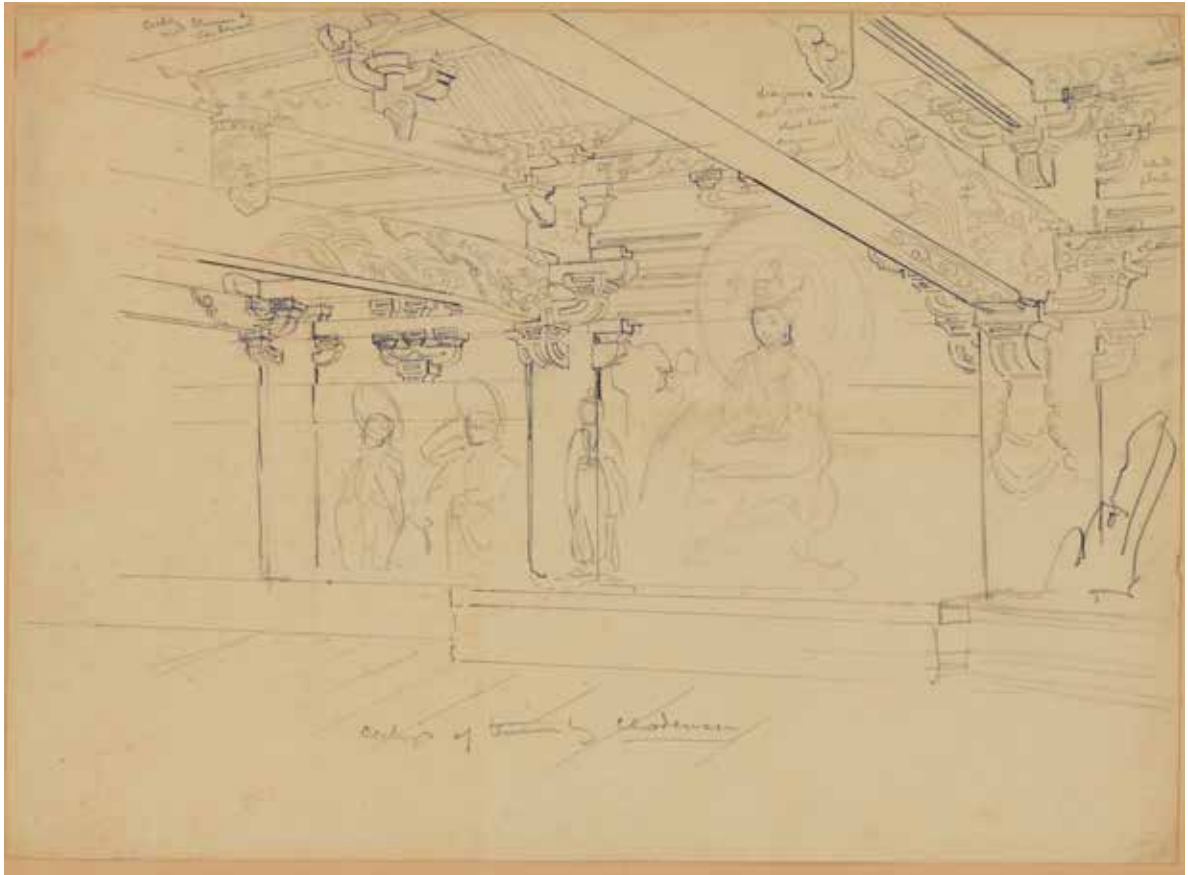


図3 コンドルのスケッチ・ブック第2冊24頁の写生(スケッチ) 東福寺山門

図版は東京大学大学院工学系研究科建築学専攻所蔵



図4 『コンドル博士遺作集』44頁 京都知恩院山門内部

- (1) 近世以来、明治時代初期の段階では、楼門両脇には土塀が配され、狛犬は置かれなかった。
- (2) 明治 15 (1882) 年 8 月、楼門前両脇に狛犬が置かれた(写真 1) <sup>注3)</sup>。
- (3) 大正 2 (1913) 年に修理があり、四条通拡張に伴い楼門を北東へ数メートル移動された<sup>注4)</sup>。
- (4) 大正 14 (1925) 年に南北の翼廊が建築された<sup>注5)</sup>。
- (5) 大正 15 (1926) 年 12 月に、現在の狛犬が安置された<sup>注6)</sup>。なお、先の狛犬は境内に移転された<sup>注7)</sup>。

つまり、この変遷に基づけば、写生(スケッチ)は(2)から(3)までの段階に行われたことが分かる。

則ち、コンドルはこの写生(スケッチ)を、八坂神社西楼門に通じる四条通南側敷地に配される建物の2階から描いたと判断できる。

#### 4. コンドルが描いた社頭風景の写生(スケッチ)の内容

コンドルが描いたこの写生(スケッチ)が、八坂神社西楼門前におけるものを描いたと判断できたが、それではこれだけの群衆の集まりは具体的にはどのような内容を描いたものであるのか、以下で考察したい。

八坂神社で行われる祭礼において境内外へ神輿の巡行があるものとすれば、祇園祭の期間、7月17日に実施される神幸祭、もしくは7月24日に行われる還幸祭を挙げることができるが、神輿の行列が西楼門を背にして西側へ進行することを考えると、八坂神社から御旅所へ向かう17日の神幸祭と考えるのが妥当であろう。

ところで、神幸祭においては中御座神輿、東御座神輿、西御座神輿の3基の神輿が八坂神社を発して四条の御旅所へ向かう。この内、東御座神輿は神輿が四角形の平面で屋根上には宝珠を掲げ、祭神は櫛稲田姫命で、神輿は東大路通を北上する。中御座神輿は六角形平面で屋根頂部に鳳凰を掲げ、祭神は素戔鳴尊で、神輿は西楼門前から四条通を西へ進む。西御座神輿は八角形平面で屋根頂部に鳳凰を頂き、祭神は八柱御子神で、これも神輿は四条通を西へ向かう。そのため、コンドルが描いた神輿は、四条通を西に向かう中御座神輿か西御座神輿となるが、神輿の形から中御座神輿とするのが妥当である。なお、第3冊1頁の神輿は八角形平面と考えれば、西御座神輿となる。

#### 5. コンドルが描いた社頭風景の写生(スケッチ)の年代

以上から、コンドルが描いた八坂神社の社頭風景は、狛犬が描かれるものの、翼廊が描かれないことから、明治15(1882)年以後の明治時代となる。また写生(スケッチ)に描かれるのが、祇園祭の神幸祭であるため、7月17日の夕刻となる。

それではコンドルがこの神幸祭の写生(スケッチ)を描いた年代はいつのことであるのだろうか。以下、この点を考察したい。

コンドルの京都行については、年譜の類いを通覧しても、その時期を具体的に記してはいない。一方、コンドルの作品に当たると、京都における作品では完成には至っていないが「西京表公旅館」が挙げられる。この作品については図面9枚が現存し、いずれにもコンドルの署名があり、

明治17(1884)年9月の日付が記載される<sup>注8)</sup>。一方、スケッチ・ブックを通覧すると、写生(スケッチ)の中に記される記載より、コンドルは明治28(1895)年3月に彦根を訪れ、少なくとも琵琶湖、彦根などにおける写生(スケッチ)を残し<sup>注9)</sup>、後述するように京都方面における写生(スケッチ)も複数枚残していると判断できる。

以上より、コンドルは少なくとも明治17(1884)年と明治28(1895)年の前後2回<sup>注10)</sup>に及ぶ京都訪問を行っていることになるが、神幸祭が挙行される時期の関係からは、明治17(1884)年の訪問に絞られそうである。

明治17(1884)年のコンドルによる京都行を見ると、『暁斎絵日記の中のジョサイア・コンデル』において

七月五日 天気 コンテル君 十五日間西京エ出立<sup>注11)</sup>とある。続いて同年8月9日には暁斎によるコンドルの稽古の様子が記されるため、この頃までには東京に戻ったことが分かる<sup>注12)</sup>。

一方、コンドルの関西における動向は明治17(1884)年7月12日付『朝日新聞』に

○東京大学御傭教師独逸人ツエー子ツ氏及チヲシアーコンダー氏の両名ハ比叡山に避暑のため一昨日京都に到着せり<sup>注13)</sup>

とある。また、『立憲新聞』でも

○外賓接待館建設 宮内省にてハ今度京都へ外賓接待館を建設せらるゝよしにて此程より滞京し居らるゝ太政官雇外人コンダー氏并ニ末松同御用掛ノ要件も全く右接待館の土地并構造方等を取調べらるゝためなりとのことなるが其位置は多分同府現今の勸業課の地所なるべしといふ<sup>注14)</sup>

とあり、コンドルの京都行は外賓接待館についての調査のためとあり、内容としては『朝日新聞』のものと矛盾するものではない。

以上より、コンドルは、明治17(1884)年7月5日以後、15日間の予定で京都へ赴いたとすることができると、コンドルが描いた祇園祭神幸祭における八坂神社西楼門前の景観は、この明治17(1884)年7月17日に実施されたものを描いたと判断できる。

#### 6. コンドルが京都で描いた写生(スケッチ)などの作品とその時期

コンドルが描いた写生(スケッチ)の内、「京都の建築物」などを題材としたものを、スケッチ・ブックなどの資料類から探し出すと以下のようにまとめることができる。

##### 6-1. スケッチ・ブックより

スケッチ・ブックにおける写生(スケッチ)を通覧すると、写生(スケッチ)に書き込まれた文字情報、描写内容から判断し、第2冊に20枚、第3冊には八坂神社の2枚を含め9枚を確認できる。

この内、第2冊には写生(スケッチ)内の記載から西本願寺、石山寺、法輪寺、京都御所、高野山、知恩院、東寺、奈良、第3冊では彦根、嵐山への訪問を確認できる。なお、描写内容より、第2冊23,24頁における山門上層の写生(スケッチ)は、構造形式などから判断して、東福寺山門を描いたものと判断できる(図3)。

表1 コンドルのスケッチ・ブックにみられる京都周辺の写生(スケッチ)

| 巻 | 頁  | 書き込み   | 場所        |
|---|----|--|-----------|
| 2 | 11 | Temple at Nishi Honganji Kyoto                         | 西本願寺      |
|   | 14 | window at Ishiyama ...                                 | 石山寺       |
|   | 14 | ...at Temple of Horiuji                                | 法輪寺       |
|   | 14 | -  | 西本願寺/臨障子  |
|   | 21 | Nishihonwanji  | 西本願寺      |
|   | 21 | Nishihonwanji  | 西本願寺      |
|   | 22 | ceiling in Kogoshō                                     | 小御所       |
|   | 22 | Kogobuji Koya  | 高野山       |
|   | 23 | -  | 東福寺/山門    |
|   | 23 | -  | 東福寺/山門    |
|   | 24 | -  | 東福寺/山門    |
|   | 30 | Gable of Chion in Hondo                                | 知恩院       |
|   | 36 | Nishi Honganji   | 西本願寺      |
|   | 37 | Old Kura   |           |
|   | 37 | Toji Temple  | 東寺        |
|   | 40 | Daihohu Den Kyoto                                      | 平安神宮      |
|   | 40 | -  | 西本願寺/能舞台? |
|   | 40 | Nara □ Hotel   | 奈良        |
|   | 41 | Kioto  | 京都        |
|   | 41 | Miyako Odori Kioto                                     | 京都        |
| 3 | 1  | -  | 八坂神社      |
|   | 5  | -  | 八坂神社      |
|   | 22 | Hikone Lake from from Castle □ March 31 of 1895        | 彦根        |
|   | 22 | Hikone Castle from Ranroku tei garden March 31 of 1895 | 彦根        |
|   | 22 | Hikone   | 彦根        |
|   | 23 | Arashiyama in Kioto                                    | 嵐山        |
|   | 23 | Hikone Lake 30/3/95 Yubukizan                          | 彦根        |
|   | 23 | Arashiyama   | 嵐山        |
|   | 23 | Arashiyama   | 嵐山        |
|   | 23 | Arashiyama   | 嵐山        |

表2 『コンドル博士遺作集』に見られる京都周辺の水彩画

| 頁  | 標題        |
|----|-----------|
| 6  | 西本願寺飛雲閣   |
| 40 | 京都御所の一部   |
| 41 | 小御所及庭園    |
| 42 | 京都二条離宮内部  |
| 43 | 京都西本願寺内部  |
| 44 | 京都知恩院山門内部 |

ところで、第3冊における「Hikone」(彦根)には、2枚に明治28(1895)年3月の日付があることから、明治17(1884)年の八坂神社とは別日程における訪問と判断できる。また、近接して「Arashiyama」(嵐山)における写生(スケッチ)が集中してあるため、これらも明治28(1895)年における訪問と考えられるかもしれない。加えて、第2冊41頁には「Miyako Odori」(都をどり)とする1枚がある。「都をどり」は春先に実施されることから、明治28(1895)年の作成と判断できる<sup>注15)</sup>。

## 6-2. 『コンドル博士遺作集』より

『コンドル博士遺作集』は、コンドルの死後、昭和6(1931)年にまとめられた作品集<sup>参考2)</sup>であるが、この中にも水彩画が多数、含まれている。京都周辺においては、西本願寺、京都御所、二条城、知恩院など6枚の水彩画を見ることができる。なお、知恩院山門<sup>注16)</sup>を描いたものは上掲したスケッチ・ブック第2冊24頁に示される東福寺山門上層の写生(スケッチ)と構図がよく類似する<sup>注17)</sup>。

## 7. さいごに

コンドルの残したスケッチ・ブック第3冊に見られる社頭祭礼風景の写生(スケッチ)について考察を加えた。明らかとなるのは以下の諸点である。

1) コンドルのスケッチ・ブック第3冊5頁に見られる社

頭祭礼風景の写生(スケッチ)は、京都の八坂神社西楼門前を描いたものとしてすることができる。

- 2) 社頭祭礼風景の写生(スケッチ)は、描写内容から祇園祭の神幸祭を描いたものと判断できる。
- 3) コンドルは明治17(1884)年7月頃と明治28(1895)年3月頃の少なくとも2回、京都を訪れている。时期的に考えて、社頭祭礼風景の写生(スケッチ)は明治17(1884)年7月17日における神幸祭の風景を描いたと考えることができる。
- 4) コンドルのスケッチ・ブックには、この、社頭祭礼風景を含め、京都周辺の写生(スケッチ)が29枚を確認できる。加えて『コンドル博士遺作集』では6枚の水彩画を見ることができるが、両者では関連する場所を描いたり、類似する構図を確認することができる。

## 参考文献

- 1) J. Conder: Sketch-book
- 2) コンドル博士記念表彰会：コンドル博士遺作集、昭和6(1931). 12

## 注

- 注1) 平山：J・コンドルの伊香保行と写生(スケッチ)について、長岡造形大学紀要18、60～67頁、令和3(2021). 3、など。
- 注2) 近藤豊：祇園祭-鉾立と細部意匠、36～37頁、昭和45(1970). 7
- 注3) 小寺慶昭：京都の狛犬、172頁、ナカニシ出版、平成11(1999). 11
- 注4) 八坂神社：八坂神社本殿及び歴史的建造物調査報告書、107頁、令和2(2020). 2
- 注5) 八坂神社：八坂神社本殿及び歴史的建造物調査報告書、107頁、前掲
- 注6) 小寺慶昭：京都の狛犬、164頁、前掲
- 注7) 小寺慶昭：京都の狛犬、172頁、前掲
- 注8) 河東義之：ジョサイア・コンドル建築図面集I、解説43～44頁、中央公論美術出版、昭和55(1980). 8。なお、図面は「第三号西京表新築公旅館 階上平面之図」の1点は日付が破損のため判読できないとする。
- 注9) 鈴木博之：ジョサイア・コンドルの建築観と日本、479頁、日本建築の特質、中央公論美術出版、昭和51(1976). 10
- 注10) この他、スケッチ・ブック第3冊の31頁に添付される写生(スケッチ)では「Kioto, Senzaki ya, O Rui San January, 1888」の記載を確認できる。但し、スケッチ・ブック第2冊19頁に納められる写生(スケッチ)では「Senzaki Hasohoro Osaka」とあることから、これは当時、大阪の北浜に所在した「専崎」と判断することができる。
- 注11) 河鍋楠美、財団法人河鍋暁斎記念美術館：暁斎絵日記の中のジョサイア・コンドル、19頁、平成9(1997). 5
- 注12) 河鍋楠美、財団法人河鍋暁斎記念美術館：暁斎絵日記の中のジョサイア・コンドル、21頁、前掲
- 注13) 朝日新聞社：朝日新聞、明治17(1884). 7/12、2頁
- 注14) 日本立憲政党政新聞社：日本立憲政党政新聞、明治17(1884). 7/12、2頁

<sup>注15)</sup> 祇園・舞ごよみ、92 頁、京都書院、平成 4（1992）。4、  
によれば、明治 28（1895）年春に行われた「都をどり」  
は、第 25 回「四方の詠め」で 4 月 7 日から 5 月 4 日  
に実施された。

<sup>注16)</sup> 参考文献 2）44 頁。なお、本文では「智恩院山門内部」  
と記される。

<sup>注17)</sup> 図 3 の智恩院山門と図 4 の東福寺山門では構図が極めて  
類似するものの、小屋組の構成が異なる。